

# 花川病院

症例概要 90代女性 診断名：脳梗塞

入院期間：2025年A月～2025年B月

経過：2024年C月起床時より起き上がれず、A院入院、脳梗塞の診断。入院後胸水の増加、COVID-19感染あり隔離中に認知面の著明な低下が見られ、D月にB院へ転院、NPPV装着、経鼻経管栄養。

当院入院時は座位保持不可、発語なく意思疎通困難、経管栄養を吐き出す様子が見られており、車椅子での生活、お楽しみ程度の食事レベルが予想された。

## 内 容

経過：

90代女性、C月に脳梗塞発症され、心不全+コロナ罹患もあり別の急性期病院へ転院、発症2カ月で当院へ来られました。当院へ来られた時点では発語無し、座位保持不可、栄養を吐き出してしまう状態でありました。発症2カ月経過しており、一般的には車椅子での生活が予想されました。一方脳画像と経過から推察すると、心不全とコロナ後の廃用が重なっている可能性があり、現状の能力をマスクしている可能性も考慮しました。年齢も考慮し、心不全悪化などに十分注意しリハビリを開始しました。また、ご家族は前院での隔離による心身の廃用を非常に気にされており、直接の面会以外に、リハビリを見学してもらい、変化があった際には逐次家族と連絡を取り、信頼を得ることができたかと思えます。

途中E月に本人の夫が当院へ見取りも見据えて入院されました。残念ながらF月にご逝去されましたが、最後の面会や葬儀にも本人参加されました。家族も面会を重ね本人に寄り添って過ごされました。食事に関しては、比較的順調に経過し、E月より経口摂取開始となりました。

食事摂取に伴い、体力も少しずつついてきて実用的な生活動作獲得を段階的に行っていました。リハビリ場面だけではなく、病棟での歩行、着替え、食事摂取を獲得し、生活の中で体力がついていき生活動作の獲得が加速されたと考えられます。また良くなっていく状況を家族とも共有し、結果的に家に帰る事を選択することが出来ました。退院時の本人の顔をみると、入院日とは比べ物にならないほど顔をふっくらされ、歩いて自宅に帰ることが出来ました。入院日の姿を振り返ると、誰も今日の姿を想像する事は出来ませんでした。本人の強い意志と、家族の温かい協力もあり、ハッピーな退院を迎える事が出来ました。

【入院時と退院時の評価】 <FIM>運動 入院時：13点→退院時68点

認知 入院時：6点→退院時25点



<各職種の関わり>

- ・医師：心不全の病態管理と、入院中の夫の病状説明。
- ・看護師：肺炎、褥瘡の予防、昼夜の生活リズムを整えた。
- ・介護士：生活動作の獲得に向けた援助。
- ・理学療法士：廃用要素改善のための段階的離床。
- ・作業療法士：ADL（食事、更衣、トイレなど）訓練。
- ・言語聴覚士：嚥下機能訓練とコミュニケーション訓練。
- ・薬剤師：医師と連携し心不全悪化予防。
- ・MSW：本人・家族の意思決定支援。在宅部門との調整。
- ・栄養サポート：体重を含めた栄養管理と経口摂取のサポート。
- ・歯科衛生士：義歯の調整。
- ・家族の関与：夫が亡くなった際の寄り添いと意思決定。